

1匹が1本になり、さらに1丁から1さく、最後に1切れになる。クイズのようだが、何のことだか  
おわかりだろうか。

マグロの数え方である。泳いでいるマグロは「匹」だが、水揚げされて横たわると「本」で数えられる。

解体される過程で名前も変わる。頭と背骨を落とした半身が「丁」、「ころ」と呼ばれる塊を短冊状

に切り分けると「さく」になる。スーパーなどでお目にかかるのが、たいていこれだ。さらに一口大  
にしたのが「切れ」で、人の口は消えていく。

さまざまな数え方を整理した『数え方の辞典 (飯田朝子・町田健・小学館)』を見ていると、日本語の複雑さ

と豊かさ改めて驚かされる。日本文化の細部を照らし出してもくれる助数詞の数々である。

こんな体験をしたことがある。貴人への献上品の一覧を記す古い文書を紹介したことがあった。そ

のなかに「ちりめん一匹」とあった。「献上品としてはあまりにみみっちいのではないか」とまじめに

指摘してきた人がいた。小さなちりめんじゃこ1匹と勘違いしたのだった。もちろん絹織物の一つの

縮緬 (ちりめん) のことである。

布の数え方も複雑だ。1匹は2反のことである。1反といえば、ほぼ大人1人前の布の大きさにあ

たる。絹布10反で「ひと締め」という。巻かれて商品として売られているときには「巻き」や「本」  
である。

忘れ去られていく数え方もある。タンスの「ひと棹 (さお)」はまだ残っているとしても、行李 (こ

うり) の「ひと梱 (こり)」は風前のともしびだろう。職人や手仕事の世界の衰微と命運をともにする

ことば  
言葉たちだ。